

# スポーツ活動の場合で用いられている「素直さ」の検証

——テキストマイニングによる自由記述回答の分析を通して——

松田 亮\*・湯浅 理枝\*\*・松尾 晋典\*\*\*

## Examination of “Honesty” in Sports Activities: Through the Analysis of Free Description Responses by Using Text Mining

Ryo Matsuda, Rie Yuasa and Shinsuke Matsuo

### Abstract

The aim of this study was to examine “honesty” as a personality trait in the setting of sports, as experienced by 243 university students (199 males and 44 females) who had experienced, or continued to experience, sports club activities. The analysis was based on contexts extracted from free description responses by using text mining to identify the factors that constituted “honesty.” The results suggested the following:

- 1) The global structure of “honesty” can be expressed in two dimensions of “understanding (self–others)” and “behavior (covert–overt).”
- 2) The factors that constitute the local structure of “honesty” can be classified into six clusters, namely “sensitivity,” “expression,” “listening,” “execution,” “accepting others,” and “self-acceptance.”
- 3) “Honesty” can be formed through the process of development.
- 4) Examination of “honesty” in the present study suggested that the psychological aspects of physical activities are strongly associated with non-cognitive abilities.

These findings provide an understanding of the global and local structures of “honesty” in the setting of sports activities. Although the results are limited to the setting of sports activities, no previous studies have taken this kind of approach by focusing on “honesty.” These findings therefore offer important insights for future studies.

## 1. はじめに

近年、IQ や学力テストのように数値化が可能な認知能力とは異なり、点数に出して測定することが困難である非認知能力は様々な研究分野から注目されている。非認知能力とは、自らの感情をコントロールする要素として関わりの

ある、意欲、忍耐力、自制心、共感性、協働性などといった自己および社会性の力として定義され (Heckman & Rubinstein, 2001; Gutman & Schoon, 2013), 心の土台のようなものであるとも示されている (遠藤, 2017)。現代のように目まぐるしく変化する社会に対応するためには、非認知能力を育むことが重要なポイントであろう。

様々な研究知見によると、非認知能力を有する者または高い者ほど、将来の満足度および労

\* 広島経済大学経営学部准教授

\*\* 広島文化学園大学学芸学部講師

\*\*\* 広島文化学園大学人間健康学部准教授

働市場における年収が高い傾向にあることや犯罪率の低さにも寄与すると報告されている (Farkas, 2003; Heckman et al, 2006; 石田ほか, 2016)。このように、社会的生産性を向上させる要因としても関連しているため、幼児期からの発達を目当てとされている研究で多く散見する。また、運動・スポーツ活動は非認知能力を養う効果的なツールであると示唆されており (夏原・加藤, 2017)、身体活動と非認知能力との関連性が高いことも報告されていることから (山北ほか, 2018)、運動・スポーツ活動に対して、教育的価値が付随していることが分かる。なお、非認知能力は生涯にかけて発達することも報告されている (遠藤, 2017)。

一方で、我が国における運動・スポーツ活動の一つとして、部活動が挙げられるだろう。部活動は学校教育の一環として、教育課程との関連を図ることが謳われていることから (文部科学省, 2017; 2018)、スポーツと教育は深く結びつけられており、青少年におけるスポーツ活動の基盤として、運動部活動が確立されている。また、昨今の国内スポーツ界では、あらゆる競技でプロ化が進んでいることから、運動部活動においても競技志向が高まり、選手の競技力向上を目指した育成において、多種多様な取り組みが行われている。その中でも、運動・スポーツ活動の現場で指揮を執っている指導者であれば、まずは選手の特徴を見抜こうとするはずである。あらゆる競技において、活躍する選手の特徴で挙げられる共通点として、「素直さ」というキーワードを耳にすることがある。「スポーツ選手は素直でないと競技力が向上しない」と喩えられていることから、競技力を向上させるためには、選手自身が「素直さ」といった性質を持つことが重要であると考えられる。

それでは、「素直さ」とは一体何なのだろうか。広辞苑 (2018) によると、素直とは①素

朴：飾り気なくありのままなこと、②正直：心の正しいこと、③従順：おだやかで人にさかわらないことなどと示されているものの、本質を突くような定義はされていないことが分かる。諸外国においても、文脈によって都合の良い訳語が挙げられていることから (能間, 2017)、「素直さ」については、曖昧な形で解釈され使用されることが多い。そして、国内の研究動向に着目すると、ビジネスの文脈として「素直さ」の役割について報告されているものが見受けられる (能間, 2017)。しかしながら、現状において「素直さ」について言及している研究は、ほとんど見当たらず、運動・スポーツ活動に関連した検証については極めて乏しい。

以上のことから、運動・スポーツ活動の現場において、「素直さ」について言及し、知見を広げることは大変意義がある。また、「素直さ」については、非認知能力の特性に含まれていることから (西坂ほか, 2017)、今後、ますます注目されるであろう、身体活動と非認知能力との関連性についても「素直さ」が重要な要因になると考えられる。

そこで本研究は、運動部活動を経験したことのある大学生を対象に、自らが抱えているスポーツとパーソナリティに関する「素直さ」について、テキストマイニングによる自由記述回答の文脈から、「素直さ」がいかなる要因から構造されているのか検証することを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1 対象者

広島県内にある2校の私立大学に在籍する2年生から4年生で運動部活動を経験したことのある学生を調査対象者とした。調査を実施するにあたり、各大学へ調査協力の依頼を行った。そして、調査協力が得られた243名 (男子199名、女子44名) を分析対象者とした。

## 2.2 調査方法

調査期間は2020年5月から7月とし、各大学では協力教員が担当する授業の前後に調査を行った。調査については、Web アンケート (Google フォーム) を用いてオンラインで回答を回収した。なお、アンケートの設定より、「メールアドレスを収集する」項目の全てのチェックボックスをオフにするよう協力教員が指示を行い、個人を特定することのないようにした。また、回答は自由意思であり、回答に協力しなくても不利益が生じないことを説明の上、実施した。

## 2.3 調査内容

調査には文章完成テストを用いた。スポーツとパーソナリティとの関わりを問う文章に対して、スポーツ活動経験の中で抱いている「素直さ」を把握するため、「素直な人とは」を設定し、自由記述を行った。また、全ての調査対象者に性別、年齢、学年、運動部活動経験の有無、運動部活動継続の有無を回答してもらった。

## 2.4 分析方法

自由記述回答に含まれる語の出現頻度や語と語の関連性を明らかにするため、テキストマイニングツールである KH Corder (Version3, beta.02f) を用いて、以下の手順により分析を行った。まず分析の手順として、テキストデータの複合語を検出するため、前処理である複合語の検出 (茶筌を利用) を行った上で抽出語のリストを出力し、自動で抽出したリスト内容を確認した。その結果、本研究の分析にあたって重要と思われる語を確認したため、「指導者」、「人間関係」、「自己中」、「練習熱心」、「可能性」、「積極的」、「自主練習」、「好印象」、「客観的」の8語を強制抽出する語に指定し、分析を行うことにした。次に、テキストデータの加工として、平仮名やカタカナを可能な限り漢字表記に

表1 統一した同意語の単語

統一前	統一後
聞く, 聞ける, 聞き入れる	→ 聞く
指導者, 監督, 先生, コーチ	→ 指導者
相手, 他人	→ 相手
向き合う, 向き合える	→ 向き合う
試す, 試みる	→ 試す

修正し、同一の語として認識されるようにした。そして、「聞く」・「聞ける」・「聞き入れる」など同意義の語についても可能な限り統一した (表1)。ただし、文脈から判断し、修正しなかった場合もある。なお、「素直」などといった語については、欠損扱いとして削除した。また、語同士の関係を可視化するため、非計量的多次元尺度構成法 (Kruskal) を行った。多次元尺度構成法とは、1次元から3次元までの散布図から探索することやクラスター分析が可能であり、共起する語の組み合わせを探るのに最適であると示されている (樋口, 2020)。

## 3. 結 果

分析対象者 (n=243) は男子199名 (82%), 女子44名 (18%) であり、平均年齢は20.4歳 (SD=0.52) であった。スポーツとパーソナリティとの関わりを問う文章に対して、スポーツ活動経験の中で抱いている「素直な人とは」について、自由記述回答の文脈より、テキストマイニング (KH Corder) を用いて分析した。総抽出語数は3,547語、異なり語数は408語であった。

### 3.1 2次元解

抽出語を用いて、「素直さ」の大局的構造を明らかにするために、非計量的多次元尺度構成法 (Kruskal) を行った。多次元尺度構成法では、布置を表現しやすいようにするため2次元

の結果を解とすることが推奨されていることから (Shepard, 1974), 本研究においても2次元の結果を解として採用した (図1)。なお, 語と語の関連を確認するにあたり Jaccard 係数を使用した。Jaccard 係数は, 語が共起しているかどうかを重視する係数であり, 語と語の共起をカウントするものと示されている (樋口, 2020)。そして, 中心部の語は共通する語がプロットされ, 外周部に行くほど目的性の強い語がプロットされることから (後藤, 2017), 図1の散布図にプロットされた語の情報を読み取る際に, 本研究では, 中心部から離れている語に着目することにした。

まず, プロットされた語である「自分」を中心に, 次元1 (横軸) では, 正の方向に, 「分

かる」, 「上達」, 「言える」, 「間違う」, 「思う」, 「失敗」, 「受け止める」, 「認める」などの語がプロットされている。これらの語を含む主な文脈として, 「自分の失敗を受け止めることができる」, 「自分のミスを知る」, 「自分の間違いを認める」などが挙げられるため, 自分自身に対する考え方や意識を肯定しようとするのが推定できる。また, 負の方向には, 「入る」, 「負ける」, 「大切」, 「指導者」, 「取り組む」, 「見る」, 「受け入れる」, 「尊重」などの語がプロットされている。これらの語を含む主な文脈としては, 「勝っても負けても相手を称える」, 「相手の話を否定から入らない」, 「相手を尊重し, 意見を取り組むことができる」などが挙げられるため, 相手自身を理解しようとするのが推

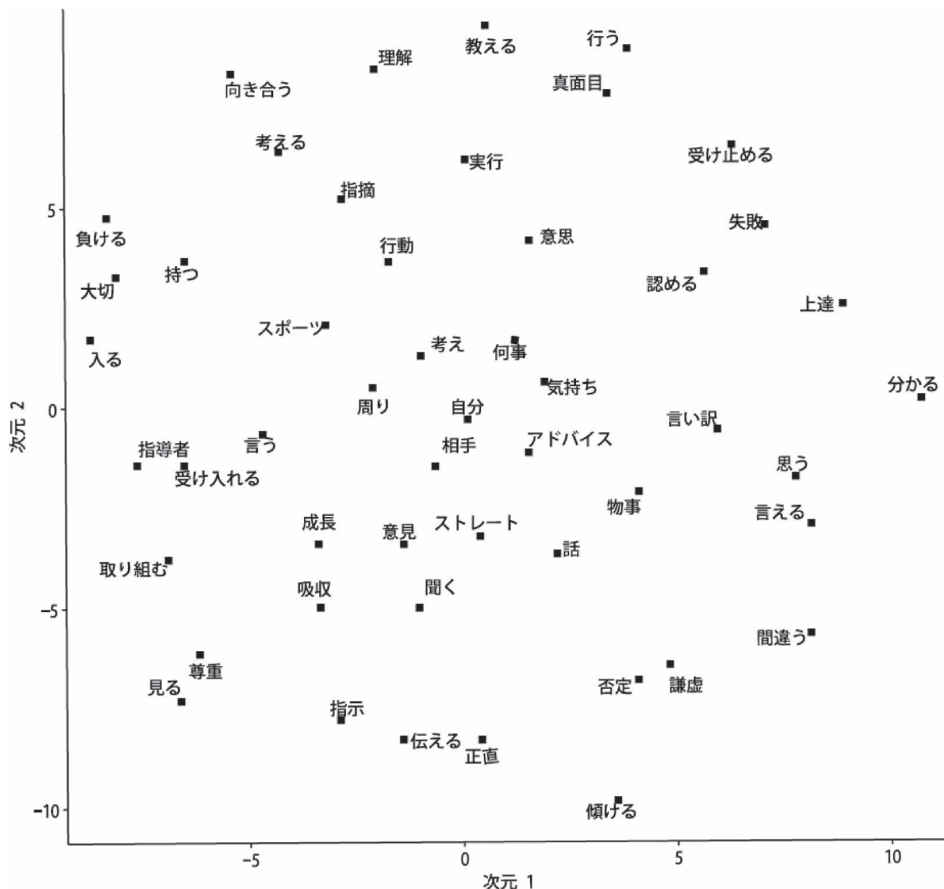


図1 多次元尺度構成法 (2次元解)



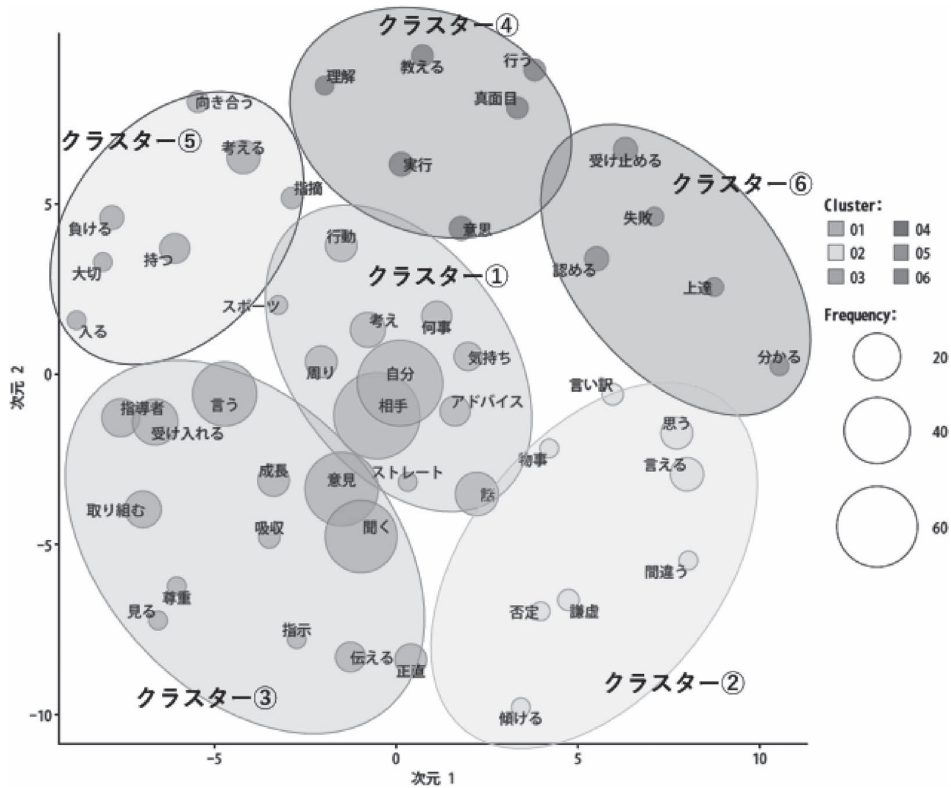


図3 クラスタ分析 (k-means 法)

にした。Jaccard 係数に基づく、クラスタ分析 (k-means 法) の結果から、本研究では、6つのクラスタを設定した (図3)。なお、モノクロでも認識できるよう、クラスタを枠で囲い加筆している。また、抽出された「素直さ」の主な内容を表2に示した。

まず、クラスタ①については、「自分」、「相手」、「考え」、「周り」、「アドバイス」、「ストレート」などの語からなるグループに分類された。この語を含む主な文脈については、「相手のアドバイスや指摘を受け入れることができる」や「自分の考えをストレートに伝えられる」という回答などから、外的要因からの刺激に対して、受け取ることや反応することが推定されるため、クラスタ①を感受性と名付けた。次に、クラスタ②については、「言える」、「物事」、「思う」などの語からなるグループに分類され

た。この語を含む主な文脈については、「自分の思ったことをはっきりと言える」、「嘘をつかずに直球で物事が言える」という回答などから、相手に対して、何かを発信しようとするのが推定されることから、クラスタ②を表現力と名付けた。続いて、クラスタ③については、「意見」、「聞く」、「指導者」、「吸収」などの語からなるグループに分類された。この語を含む主な文脈については、「相手の意見や指示を聞くことができる」、「相手の話をよく聞き、自分の必要なものを吸収する」という回答などから、相手の意見などに耳を傾けていると推定できることから、クラスタ③を傾聴力と名付けた。そして、クラスタ④については、「理解」、「実行」、「意思」などの語からなるグループに分類された。この語を含む主な文脈については、「相手の言っていることを理解し、実行できる」、

表2 自由記述「素直な人とは」に回答した主な文脈について

「素直さ」クラスター	自由記述回答による文脈	解釈
クラスター①	相手の <u>アドバイス</u> や <u>指摘</u> を受け入れることができる 自分の <u>考え</u> を <u>ストレート</u> に伝えられる 周りの <u>意見</u> を積極的に <u>取り組む</u>	感受性
クラスター②	感謝の <u>気持ち</u> や <u>思ったこと</u> などを言葉にできる 自分の <u>思ったこと</u> をはっきり <u>言える</u> 嘘をつかずに直球で <u>物事</u> が <u>言える</u>	表現力
クラスター③	相手の <u>意見</u> や <u>指示</u> を <u>聞く</u> ことができる 相手の話をよく <u>聞き</u> 、自分の必要なものを <u>吸収</u> する <u>指導者の意見</u> を <u>しっかり聞く</u>	傾聴力
クラスター④	相手の <u>言っていること</u> を <u>理解</u> し、 <u>実行</u> できる 自分の <u>意思</u> を持って <u>実行</u> できる 相手の <u>考え</u> を <u>理解</u> できる	実行力
クラスター⑤	とても優しい、相手や家族を <u>大切に</u> している 勝っても <u>負けても</u> 相手を <u>称える</u> 相手の <u>指摘</u> を受け入れ、次の行動をどうするか <u>考える</u>	他者受容
クラスター⑥	自分の <u>失敗</u> を <u>認められる</u> <u>上達</u> や <u>習得</u> が早い 自分の悪いところを <u>受け止め</u> 、改善することができる	自己受容

「自分の意思をもって実行できる」という回答などから、物事を理解したうえで行動に移そうとしていることが推定できるため、クラスター④を実行力と名付けた。さらに、クラスター⑤については、「考える」、「大切」、「負ける」、「指摘」などの語からなるグループに分類された。この語を含む主な文脈については、「とても優しい、相手や家族を大切にしている」、「勝っても負けても相手を称える」という回答などから、相手の存在を受け止めようとすること推定されることから、クラスター⑤を他者受容と名付けた。最後に、クラスター⑥については、「受け止める」、「認める」、「失敗」、「上達」などの語からなるグループに分類された。この語を含む主な文脈については、「自分の失敗を認められる」、「自分の悪いところを受け止め、改善することができる」という回答などから、ありのままの自分を受け止めようと推定できることか

ら、クラスター⑥を自己受容と名付けた。このように、本研究においては、6つのクラスターに分類した(図2)。

#### 4. 考 察

本研究では、運動部活動を経験したことのある大学生を対象に、自らが抱いているスポーツとパーソナリティに関する「素直さ」について、テキストマイニングによる自由記述回答の文脈から、「素直さ」がいかなる要因から構造されているのか検証した。そして、多次元尺度構成法による2次元解によって、「素直さ」の大局的構造における要因について解釈を行った(図2)。また、階層的クラスター分析であると、結果がしばしば異なることや(石田・金, 2012)、図が非常に大きくなり、空間の節約という観点から不利であるため(樋口, 2020)、本研究では、非階層的クラスター分析によって、

「素直さ」の局所的構造における要因について解釈を行った(図3)。なお、質的データ分析ソフトから得られた結果の解釈については、研究者に委ねられている(稲葉・抱井, 2011)。そこで、本研究においても、得られた結果については、筆者の解釈をもとに、「素直さ」の大局的構造および局所的構造の要因について検証を述べていく。

#### 4.1 「素直さ」の大局的構造について

本研究において、「素直さ」の構造を検証するため、テキストマイニングによる多次元尺度構成法の2次元解から、「素直さ」の大局的構造を分析することにした。得られた結果を解釈し、次元1の横軸を「理解(自己-他者)」、次元2の縦軸を「行動(潜在的-顕在的)」として、大局的構造の特徴を示すことができた(図2)。

まず、次元1において、正の方向では、「分かる」、「上達」、「言える」、「間違う」、「思う」、「失敗」、「受け止める」、「認める」などの語がプロットされた。より解釈を深めるにあたり、文脈も調査したところ、正の方向を自己理解であると解釈した。自己理解については、自分自身の考えや特性について理解し把握する力であると示されている(平野, 2010)。次元1における正方向の文脈からは、「自分の失敗を受け止めることができる」、「自分の間違いを認める」などが挙げられ、自分自身の行動特性について十分把握できていると文脈から確認できることから、正の方向を自己理解と解釈したことについては、妥当であったと考えられる。そして、負の方向では、「入る」、「負ける」、「大切」、「指導者」、「取り組む」、「見る」、「受け入れる」、「尊重」などの語がプロットされた。より解釈を深めるにあたり、正の方向と同様に、文脈も調査したところ、負の方向を他者理解であると解釈した。他者理解とは、他者の感情を認識・

推定・理解する力を指している(溝川・子安, 2015)。次元1における負方向の文脈からは、「相手の話を否定から入らない」、「相手を尊重し、意見を取り組むことができる」などが挙げられ、他者の感情を読み取ろうとする文脈が確認できることから、負の方向を自己理解と推察することができるだろう。また、図2の散布図の中心は「自分」という語がプロットされており、語と語の共起関係が強いとされる周辺には、「相手」という語がプロットされている。したがって、これらの語は「自己」と「他者」を連想させる語でもあり、自己への理解と他者への理解は相即していることから(多久島ほか, 2015)、本研究における、「素直さ」については、自己と他者との相互関係が大きく影響していると考えられる。

次に、次元2において、正の方向では、「教える」、「行う」、「理解」、「向き合う」、「真面目」、「考える」などの語がプロットされ、負の方向では、「傾ける」、「正直」、「伝える」、「指示」などの語がプロットされた。より解釈を深めるにあたり、文脈も調査したところ、次元2における正方向の文脈からは、「教えられたことをそのまま行う」、「真面目に取り組む」などが挙げられたことから、正の方向を潜在的行動として解釈した。同様に次元2の負方向の文脈からは、「相手の意見に耳を傾ける」、「指示されたことを試してみる」などが挙げられたことから負の方向を顕在的行動であると解釈した。客観的に人の態度や行動から現れる主張を意識的に認知できない場合を潜在的行動、意識的に認知できる場合を顕在的行動と示していることから(小塩ほか, 2009)、次元2における、正の方向および負の方向についても、解釈は妥当であったと考えられる。したがって、スポーツ活動場面における素直な人については、他者からの意見をもとに、自らが何かしらの行動を起こそうとするが、意識的に認知できてい



る者と認知できていない者とが存在する構造であることが分かった。

このことから、本研究のテキストデータから、「素直さ」の大局的構造を「理解（自己－他者）」、「行動（潜在的－顕在的）」の2次元で表すことができる可能性が示された。

#### 4.2 「素直さ」の局所的構造について

本研究の自由記述回答で得られたテキストデータにおいて、テキストマイニングによるクラスター分析をした結果、「素直さ」の局所的構造における要因については、「感受性」、「表現力」、「傾聴力」、「実行力」、「他者受容」、「自己受容」といった6つのクラスターを分類した（図3、表2）。

まず、図3に示されている「素直さ」クラスターの特徴を探索すると、次元1では、「クラスター②：表現力」と「クラスター⑥：自己受容」が正の方向に、「クラスター③：傾聴力」と「クラスター⑤：他者受容」が負の方向に寄与した。これらの要因は、他者との関係において、相互作用を及ぼし、練習して身につけた技能とされる社会的スキルやコミュニケーションスキルの尺度構成に含まれている要因とも関与している（相川、2000；藤本・大坊、2007）。つまり、次元1については、他者との密接な関係性が認識できることから、前述の大局的構造において示した、「理解（自己－他者）」の相互関係を強めるものとして支持できるのではないだろうか。したがって、スポーツ場面では、他者と十分に関わることで、人間的成長も内在させる向社会的行動が正起するのではないかと考えられる。

次に、次元2では、「クラスター④：実行力」と「クラスター⑤：他者受容」および「クラスター⑥：自己受容」が正の方向に、「クラスター②：表現力」と「クラスター③：傾聴力」が負の方向に寄与した。次元2における大局的構造

では、自らが何かしらの行動を起こそうとするが、他者からの情報を意識的に認知できている顕在的行動と認知できない潜在的行動に分けて構造を示すことができた。前述による大局的構造の観点から、顕在的行動へは後者に当たる、表現力と傾聴力といったクラスターが分類されている。このことから、他者からの情報を意識的に認知できている者は、相手の話を聞く力などが特に優れているのではないかと感じられる。したがって、他者に対して、傾聴する姿勢や自らの意思を示すといった行為が非常に重要な行動であると推察できる。

そして、次元1および次元2の中心に「クラスター①：感受性」が寄与された。感受性は対人スキルの側面に位置付けられており（Danish et al, 1993）、前述で示したように、他者との相互関係が影響していると推察できる。すなわち、他者からの刺激をどのように感知し、自分自身の意思で適切に処理していくことができるスキルが求められるのではないだろうか。また、対人スキルは学習や経験および練習することによって獲得可能なスキルであると報告されている（川畑、1997）。したがって、本研究における「素直さ」については、生まれ持ったままに何ら変化のないパーソナリティという位置づけではなく、発達しながら形成していくことが可能である性質を持っているのではないかと考えられる。

#### 4.3 本研究における「素直さ」の多面的アプローチについて

本研究では、「素直さ」の構造要因として、大局的構造では、「理解（自己－他者）」、「機能（潜在的－顕在的）」の2次元、局所的構造では、「感受性」、「表現力」、「傾聴力」、「実行力」、「他者受容」、「自己受容」といった6つのクラスターから構造されていることを確認した。「素直さ」は合理性だけで決定するのではなく、人格・性

格と関連していることや (Bertland, 2009), 複数の側面をもった複雑な概念であり, 人格・性格といった心理的側面が不可欠であると示唆している (能間, 2017)。また, テキストマイニングにおける自由記述の利点としては, 対象者本人が感じていることや思っている心理的要素を引き出すことができる点である。そのため, 本研究においても, 先行研究と同様に, 心理的側面が十分に関与した結果であることも支持されるだろう。

そして, 本研究の「素直さ」については, 発達しながら形成することが可能である性質を持っていると示した。「素直さ」を非認知能力の特性として含んでいることや (西坂ほか, 2017), 非認知能力は生涯にかけて発達することが確認されていることから (遠藤, 2017), 身体活動を伴った心理的側面と非認知能力が強く関連しているのではないかと考えられる。このことから, スポーツ活動場面での「素直さ」に着目した尺度を開発することで, 新たなアスリートの特徴を非認知能力の観点から, 評価することも可能ではないだろうか。例えば, スポーツ現場では, 「素直な子は, 競技力が向上する」などと表現することがあるが, 現状で, どのぐらい「素直さ」の要因をアスリートが有しているのかが判断できれば, 指導者のアプローチの仕方を変化することも可能で, 非常に有効な手段になると考える。

さらに, 「素直さ」が発達するという観点から, アスリートの育成に「認知能力か非認知能力か」といった新たな視点で議論を進めてみることも可能になるであろう。競技種目によるかもしれないが, アスリートの育成をめぐる「遺伝か環境か」あるいは「素質か練習か」といった二項対立の議論がされている中で (伊藤, 2018), アスリートにおける素直さの発達曲線が明らかになれば, 高校生および大学生アスリートの競技力向上を予測し, リクルート活動

の展開として新たな視点の獲得に寄与できる可能性が生まれるのではないだろうか。

以上のことから, 本研究における「素直さ」の構造については, 非認知能力と強い関連性があると示唆することができた。そして, 「素直さ」の構造を理解し, 発展させていくことで, 多面的アプローチの手段として活用できることが期待される。なお, 最後に本研究のテキストデータの解釈から, 筆者の恣意的な誘導結果になっていたのではないかと懸念が生じる。また, 結果を一般化するにはサンプルが十分であったとは言えず, 対象者の範囲を広げることも検討する必要があると考えられる。これらを踏まえ, 今後の課題については, さらなる知見を深めるとともに, 性差について検討することも挙げられる。そして, 本研究で得られた結果をもとに尺度を構成し, 「素直さ」の実態を明らかにする必要があるだろう。

## 5. おわりに

本研究では, 運動部活動を経験したことのある大学生243名 (男子199名, 女子44名) を対象として, 自らが抱えているスポーツとパーソナリティに関する「素直さ」について, テキストマイニングによる自由記述回答の文脈から, 「素直さ」がいかなる要因から構造されているのか検証することを目的とした。考察の結果, 以下のような結論を得た。

- 1) 「素直さ」における, 大局的構造を「理解 (自己-他者)」, 「行動 (潜在的-顕在的)」の2次元で表わせることを示唆した。
- 2) 「素直さ」の局所的構造における要因については, 「感受性」, 「表現力」, 「傾聴力」, 「実行力」, 「他者受容」, 「自己受容」といった6つのクラスターで分類することができると示唆した。
- 3) 「素直さ」は, 発達しながら形成していくことが可能である性質を持っていると推察さ

れた。

4) 本研究の「素直さ」から、身体活動を伴った心理的側面と非認知能力が強く関連していることが示唆された。

以上のことから、本研究の結果により、スポーツ活動の場合で用いられる「素直さ」の大局的構造および局所的構造について理解することができた。なお、本研究の結果は、スポーツ活動といった限定的なものではあるが、「素直さ」をテーマに用いて、このようなアプローチをした先行研究は見られず、今後の研究への重要な資料となるだろう。

## 参 考 文 献

- Bertland, A. (2009) "Virtue ethics in business and the capabilities approach." *Journal of Business Ethics*, 84(1), 25-32.
- Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D. (1993) "Life development intervention for athletes: Life skills through sports." *The Counseling Psychologist*, 21, 352-385.
- Farkas, G. (2003) "Cognitive skills and noncognitive traits and behaviors in stratification processes." *Annual Review of Sociology*, 29, 541-562.
- Gutman, L. M., and Schoon, I. (2013) "The impact of non-cognitive skills on outcomes for young people." *Education Endowment Foundation*.
- Heckman, J. J., and Rubinstein, Y. (2001) "The importance of noncognitive skills: Lessons from the GED testing program." *The American Economic Review*, 91(2), 145-149.
- Heckman, J. J., Stixrud, J., and Urzua, S. (2006) "The Effects of Cognitive and Noncognitive Abilities on Labor Market Outcomes and Social Behavior." *J. LaborEcon*, 24(3), 411-482.
- Shepard, Roger N. (1974) "Representation of Structure in Similarity Data." *Psychometrika*, 39, 373-421.
- 相川 充 (2000) 『人づきあいの技術—社会的スキルの心理学』サイエンス社.
- 遠藤利彦 (2017) 「非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」. 『平成27年度プロジェクト研究報告書』国立教育政策研究所. <syocyu-2-1\_a.pdf (nier.go.jp)>
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007) 「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」. 『パーソナリティ心理学研究』, 15 : 347-361.
- 後藤和史 (2017) 「教職員のわいせつ行為のニュース記事のテキストマイニングによる分析」. 『瀬木学園紀要』, 11 : 100-110.
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して 第2版』ナカニシヤ出版.
- 平野真理 (2010) 「レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成—」. 『パーソナリティ研究』, 19(2) : 94-106.
- 稲葉光行・抱井尚子 (2011) 「質的データ分析におけるグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチの提案—がん告知の可否をめぐるフォーカスグループでの議論の分析から—」. 『政策科学』, 18(3) : 255-276.
- 石田 浩・有田 伸・藤原 翔・小川和孝 (2016) 「『働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 (JLPS) 2015』から見る非認知スキル、仕事の負担、結婚に影響する意識、資産の不等 (全編)」. 『中央調査法』, 6191-6197.
- 石田基広・金 明哲編 (2012) 『コーパスとテキストマイニング』共立出版.
- 伊藤静夫 (2018) 「陸上競技青少年育成モデルを再考する—身体リテラシー育成との関連から日本小学校陸上を展望—」. 『陸上競技研究紀要』, 14 : 4-11.
- 川畑徹朗 (1997) 「健康教育とライフスキル学習の新たな提案—個性を伸ばし、自己実現を支援する—」. 『学校運営研究』, 36(9) : 14-17.
- 溝川 藍・子安増生 (2015) 「他者理解と共感性の発達」. 『Japanese Psychological Review』, 58(3) : 360-371.
- 小塩真司・西野拓朗・速水敏彦 (2009) 「潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連」. 『パーソナリティ研究』, 17(3) : 250-260.
- 夏原隆之・加藤貴昭 (2017) 「児童期および青年期の子どもにおける非認知スキルの発達とスポーツ活動との関連性に関する研究—スポーツの何が非認知スキルの獲得に寄与しているのか?—」. 『笹川スポーツ研究助成研究成果報告書』, 293-299.
- 新村 出編 (2018) 『広辞苑 第7版』岩波書店.
- 西坂小百合・岩立京子・松井智子 (2017) 「幼児の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係」. 『共立女子大学家政学部紀要』, 63 : 135-142.
- 能間寛子 (2017) 「職場における「素直さ」の役割：フォロワーの視点から」. 『文京学院大学外国語学部紀要』, 16 : 61-70.
- 多久島寛孝・田中康子・中原恵美・羽田野花美・山本勝則 (2015) 「自己理解と他者理解を深める事例検討会の意義と教育的効果—患者との援助的関係形成能力の育成に向けて—」. 『保健科学研究誌』, 12 : 41-52.
- 山北満哉・安藤大輔・佐藤美理・秋山有佳・鈴木孝太・山縣然太郎 (2018) 「子どものスポーツ活動と Grit (やり抜く力) の関連：横断研究」. 『日本健康教育学会誌』, 26(4) : 353-362.